

55

千代田区景観まちづくり重要物件

旧常磐橋

指定日 2007（平成 19）年 3 月 28 日

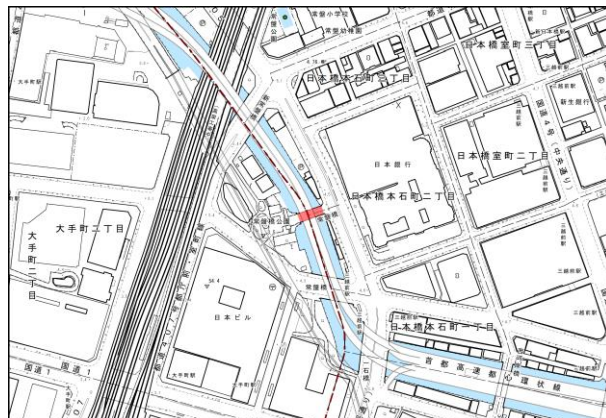
所在地 大手町二丁目 7 番先～中央区日本橋本
石町二丁目 1 番,三丁目 1 番先
（日本橋川）

設計者 山城祐介

竣工 1877（明治 10）年
2018（平成 30）年 7 月建替え

文化財等
指定状況

-



▲常磐橋

歴史・文化的特徴

旧常磐橋は、1977（明治 10）年に木橋から架け替えられた石橋で、庭園にあるものを除き、都内に残る最も古い石橋と言われています。江戸城常盤橋門跡に立地しており、文明開化期を象徴する国指定史跡に指定されています。しかし、東日本大震災により橋の積石が歪み、崩落の危険が生じたため、修復工事が行われることとなりました。

旧常磐橋が地震の被害を受けるのはこれが初めてではなく、1923（大正 12）年に発生した関東大震災でも大きな被害を受けています。その後、常磐橋は長い間修理されずにいましたが、1934（昭和 9）年に復興事業の一環として修復工事が実施されました。この修復工事は、渋沢栄一やその遺志を継ぐ「渋沢青淵翁記念会」の支援によって進められたと言われ、旧常磐橋再建と共に整備された常盤橋公園内には渋沢栄一像が建てられています。

ちなみに、1926（大正 15）年の震災復興事業において、常磐橋の約 50 メートル南にコンクリート製の頑強な常盤橋が架けられているほか、1988（昭和 63）年には常磐橋から北へ約 50 メートルの位置に鋼製の新常盤橋が架けられており、このエリアには「ときわばし」を冠する橋が 3 つ存在します。

意匠・構造の特徴

東京都内唯一の洋風石造アーチ橋として貴重な建造物で、石貼 2 連アーチの優美な姿が印象的です。

修復時には、建設当時の姿へ復元することが念頭におかれ、取り外す石はあらかじめ番付した上で解体し、積み方などを記録することで復元時に元通りに積みなおす、修理して使える部材は出来るだけ再利用する、新しい石材を使うことになった箇所でも全て廃棄せずにそれより小さい部材に再加工するなどの工夫が徹底されました。一部を除き、橋に使われている石は、江戸城小石川門の石垣の再利用であることが判明しています。

その結果、御門を意識した和風の意匠が用いられている灯籠様の親柱、石積の橋台などの特徴や、路面も石貼で、車道、歩道で異なる貼り方をされた石、凝った意匠の手すりなど、建設当時の旧常磐橋の意匠や構造の特徴が引き継がれています。

周辺景観との関係

橋を渡ると、特徴的な親柱、石貼の路面をよく見ることができます。橋上からの眺望は首都高速道路の高架によりあまり開けていません。

道路や公園からはアーチ橋の印象的な姿がよく見えますが、高架により圧迫感のある景観となっています。水面からは 2 連アーチの優美な姿を見ることができますが、高架が橋への視界を遮っています。

旧常磐橋周辺地域では「常盤橋街区」として超高層ビルの建設など大規模な再開発計画が進んでいるほか、首都高速道路の地下化も進んでおり、旧常磐橋周辺の風景は今後大きく変わることが予想されます。



▲常磐橋の親柱